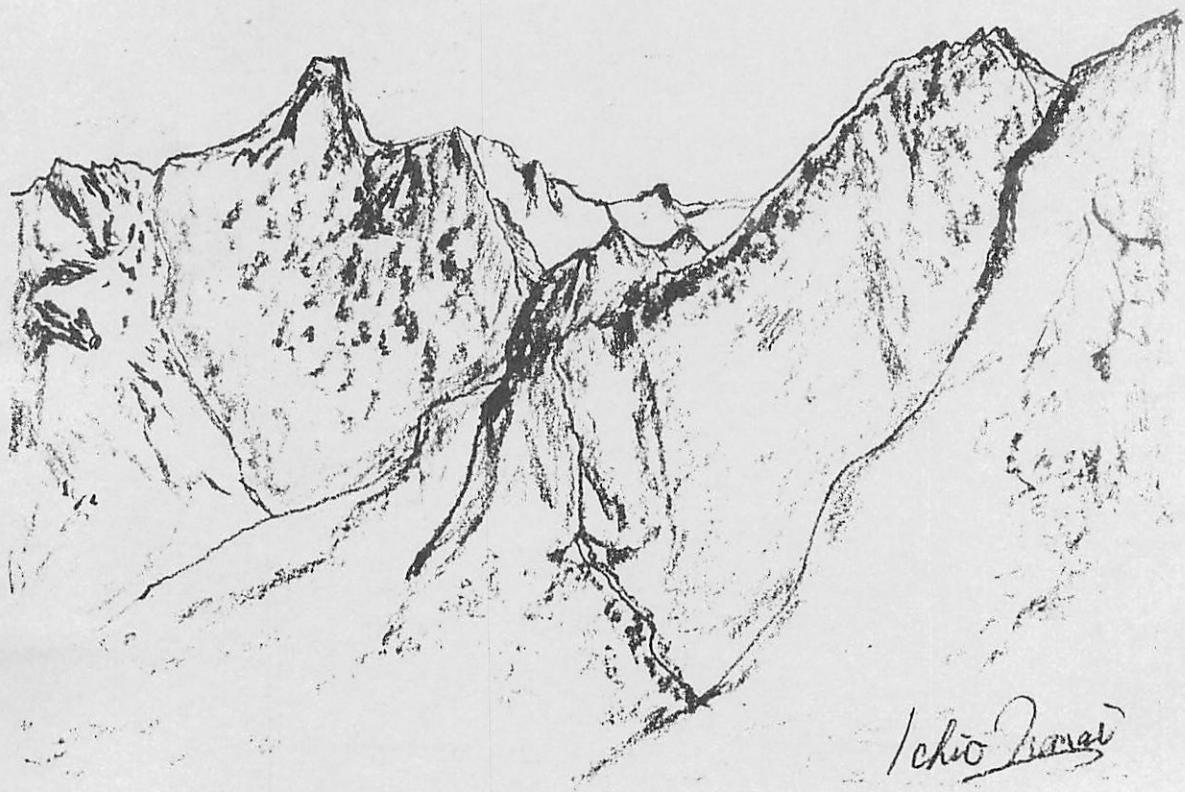


# R&V

15号

1994年

秋号 10月～12月



# 登山雑誌 R&V

R & V

15号



十一面岩白熊フェースを登る

94年秋

ACC-J茨城

## 阪神大震災に思うこと

1月17日阪神大震災が発生した。私達が生まれてから最大の大地震である。亡くなった人は5000名を越えてしまった。知人の池上さん（元大阪わらじの会会員）も災害のひどかった東灘区に住んでおり、心配したが無事だったようで安心した。テレビで見ていると、初め自分が想像していたよりはるかに大きい地震であったようだ。我々山屋、つまり反社会的行為を趣味としている者達（自分ではそう思っていないが、山を登らない一部の人はそう思っているらしい。なんでも、テントに泊まり、魚は釣ってしまうし、木はぶった切るし、あげくはゴミを捨てていく。遭難をおこせば地元に迷惑をかけるだけで、害あって益なしのとんでもない野郎達とか）は、こんな時こそ被災者のお役に立てればと、山行の一回も中止してボランティアに参加すべきだと思った。しかし、今日現在（1月31日）は数の上では十分で、すでに申し込みを断っているという。ただ夜中の作業とか長期間活動してくれるボランティアは不足しているそうだ。茨城の我々には精々2～3日というところだろうからちょっと無理だろう。まあポケットマネーから義援金に協力するくらいしか出来ないかも知れない。海外からも援助物質がどんどん届いているのに、日本人でありながら対岸の火事とばかり、知らんふりはできないはずだ。

地震といえば、我々山屋が山行中にこんな地震にあったらどうなるであろう。ギリギリのバランスで登攀中の者は振り落とされ、雪面をトラバース中の者は雪崩に巻き込まれ、谷を遡行中の者は落石の下敷きになってしまふかも知れないのだ。はっきりした記憶ではないが、新潟地震の時、一の倉沢を登っていた人の記録を読んだことがあるような気がする。一の倉沢は全面からの落石のため、土埃に覆われ何にも見えなくなってしまったという。身体のそばを無数の落石がビュンビュンと落ちる中、無事で帰れたのが不思議だったろう。この時、烏帽子岩の一部が崩壊し烏帽子スラブの基部に採石の小山ができた（これは間違いない記憶）。想像しただけでも恐ろしくなるではないか。と言っても防ぐ方法もないし、強いて言えば山に行かないでいるほかない。それとも観天望氣の中に地震雲の有無を発見する方法なども研究したほうがよいかもしれない（はたして本当に地震雲なるものがあるかどうか知らないが）。

今回の阪神大震災でも高速道路を走行中の車で、止まったため転落を免れたスキーバスや、走り抜けてしまったため無事だったトラックなど、運というものがあるようだ。山でも先行パーティのトレールがデブリの中に消えており、数m先からまた続いた時があったが、これなどは先行パーティと我々の間の数分間に起きた雪崩だ。

どちらのパーティも運が良かったのだ。長年、山をやっていると、あと半日遅かったら、あと一日遅かったらもしかして、と下山後考えることが何度もある。これは知識や技術で危険を回避しているばかりではなく、運も相当あるのだ。よくマージャンで“運も技術の内”という。ついていない時は、無理せずその場の流れに従ってなるべく負けを少なくすることを考え、ついてきたら一気に勝負にでるといったあんばいだ。そういうことが分かる人は相当の打ち手であろう。さて同じことが山にも言えるだろうか。知識も技術も超一流の有名登山家が数多く逝ってしまったが、そういう兆候があったかどうか聞けるものなら聞いてみたいものだが・・・。

最後に被災地の一日も早い復興と、被災された岳人が一日も早く登山にカムバックできることを祈ります。

(本図一統)



かくの山は、その山の名前を冠して「山名山」。予測、計画された山の開拓は、それが山の開拓者たちによって行われる。しかし、同時に喰らうのが大谷山下山口では、必ずささやかで販賣店で山の名前を冠した「山名山」。この山の開拓は、山の開拓者たちによって行われる。

## 《目次》

1994年 秋号 10月～12月第15号 ACC-J茨城

---

阪神大震災に思うこと	1
集会報告	4
山行報告	5
四十八滝沢（沢登り）～三つ峠岩場（岩登り）	6
長谷川恒男CUP	9
一の倉沢2ルンゼ～Bルンゼ	12
谷川岳幽の沢V字状岩壁右ルート	15
瑞牆山十一面岩正面壁【春一番ルート】	17
一の倉沢中央稜	21
尾瀬遭難者捜索	23
湯河原幕岩～古賀志ゲレンデツアーデ	27
関西の名物ゲレンデ	29
西上州、焼岩・大山	30
富士山登頂《一日で2900mを登る》	33
富士山に想う	35
友好山岳団体の月報・会報紹介	36
編集後記	38

---

\*表紙絵…ジャヌー北壁\*

## 集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

### 【10月】

10月12日

出席者 本団、笹沢、古山、高田、中居、高須、今井、坂本

10月26日

出席者 本団、古山、中居、生井、高田、佐藤、告、菊池、高須、鈴木  
長久保

### 【11月】

11月 9日

出席者 本団、高須、笹沢、坂本、村上(儀)、生井、高田、菊池、古山  
馬渕、告、澤田

11月24日

出席者 本団、高須、高田、佐藤、村上(儀)、坂本、菊池、告、村上(儀)  
馬渕

11月30日 《高田氏送別会》

出席者 本団、木村、菊池、鯉河、中島、生井、高田夫妻、高木、佐藤、  
長久保、中居、古山、馬渕、今井、告、坂本、澤田、高須、村上(儀)  
長浜、広瀬、栗原、庄司

### 【12月】

12月 7日

出席者 本団、菊池、生井、高須、村上(儀)、佐藤、古山

12月21日

出席者 本団、菊池、古山、村上(儀)、高須、今井、告、馬渕、澤田

## 山行報告

1994年 10月～12月

### 【10月】

- 10月 2日 四十八滝沢～三ツ峠RCT L本団、古山、高須、坂本、澤田  
10月8～9日 長谷川恒男カップ 高須  
10月 9日 谷川岳一の倉沢2ルンゼ L古山、中居、坂本  
10月9～10日 瑞牆山十一面岩正面壁  
春一番ルート L本団、生井、佐藤  
10月16日 谷川岳一の倉沢中央稜 L古山、笹沢、高須  
10月19日 尾瀬遭難救助出動 L本団、鯉河、菊池、生井、高田、  
古山、佐藤  
10月23日 遭難救助訓練 L本団、生井、高田、佐藤、古山、  
馬渕、中居、坂本、高須、澤田、告  
10月30日 松木沢ウメコバ沢  
中央岩峰右ルート L古山、高須  
10月30日 松木沢RCT L鈴木、告

### 【11月】

- 11月 3日 西上州・焼岩(雨天の蹴逃) L本団、鈴木、生井、佐藤、今井  
11月 5日 湯河原・幕岩RCT L高須、佐藤  
11月 6日 古賀志山RCT L高須、佐藤  
11月 6日 鹿沼の岩場RCT L本団、坂本、村上(健)、高田  
11月13日 古賀志山RCT L中居、澤田、馬渕、村上(健)、佐藤  
鈴木  
11月12日 六甲山・不動岩 高須  
11月13日 六甲山・烏帽子岩 高須  
11月20日 鹿沼の岩場RCT(?) L本団、生井、佐藤、坂本、笹沢、  
告、高須、村上(健)  
11月27日 西上州・焼岩・大岩 L本団、古山

### 【12月】

- 12月3～4日 富士山登頂 L高須、村上(健)  
12月 4日 富士山雪上訓練 L本団、佐藤、古山、馬渕、中居、告

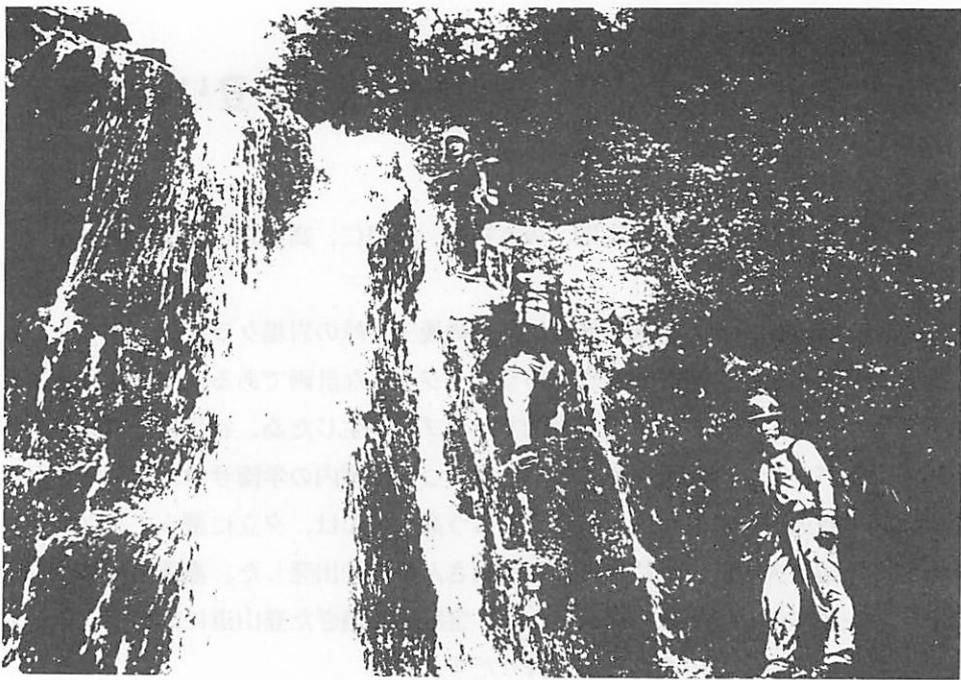
## 四十八滝沢（沢登り）～三ツ峠岩場（岩登り）

1994. 10. 2

パーティ L本図一統、佐藤文則、坂本裕仁、澤田仁、高須章、古山正文

三つ峠の東面の四十八滝沢を詰めて、その後三つ峠の岩場クライミングを…つまり、一度に沢登りと岩登りを楽しもうというゴージャスな計画である。本来なら谷川岳へ行く予定だったのであるが、出発段階でトラブルが生じた為、谷川岳行きを断念した。澤田、高須パーティも同行することになり、つくば市内の学園サウナ前に集合となつた。土浦の花火大会を見に行ってきたという高須さんは、夕立に遭ってズブ濡れになつて現れた。図情大の駐車場に移動し、本図さんの車で出発した。都留 I.Cで高速を降り、コンビニでビール類を購入した後、宝鉱山を過ぎた登山道に向かう。テントを張り小宴後、就寝。この頃から雨が降りだす。

昨夜からの雨はシトシト降り続いている。側の沢は増水し、濁流となっている。この分では、沢はもちろん岩場も濡れていて無理だろうと思っていたが、天気の様子見の態勢に入る。やはり本図さんの粘り腰というか、転んでも唯では起きないというか……。すると晴れ間が覗きだし、10時頃には雨も止み、出発することになった。坂本さんは、地下足袋にワラジというスタイルであった。その地下足袋はつくばから6号道沿いに石岡辺りまで探しに行ったが見つからず、帰りに高速を使ったら土浦辺りで花火の渋滞に引っかかり散々な目にあった後、荒川沖のジョイフル本田でようやく購入という代物であったが、何とその地下足袋は足袋ではなく、シューズになっていた。つまり先が割れていなかつたのである。無理矢理ワラジをつける事にして、とにかく出発。始めは登山道を行く。約1時間で入渓地点に着く。高須さんはここで分かれて登山道を登り上の岩場で合流する予定だったが、増水した沢を途中で引き返す可能性も有り、合流が難しくなるので、運動靴のまま沢を行く事にした。沢全体としては難しい所も無く、もっとも増水のため2つの滝では高巻くことになったが、ザイルを出すことも無く、沢の源流の水の涌き出しに着く。涌き出す水は、地下深くからのものらしく手の切れるほど冷たい水であった。この後は、濁れ沢を詰めて、木登りして、林道に出て終了。すでに午後2時を過ぎている。三つ峠山頂を踏んで小屋前で着替えをし、登攀準備をする。右フェースの取り付きまで下って行き、本図・高須パーティ、佐藤・澤田パーティ、及び古山・坂本パーティに分かれて取り付く。岩場で練習しているグループはそろそろ終わりにしようかとしているのだが、我々は今か



四十八滝を行く



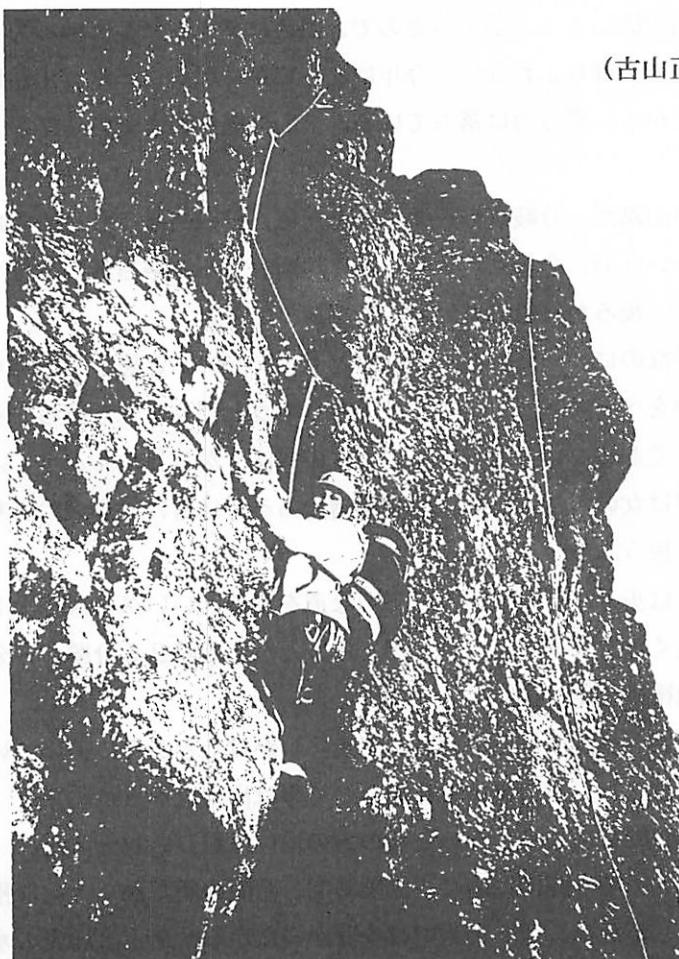
四十八滝を行く

ら登攀開始なのである。本図・高須パーティと佐藤・澤田パーティは観音右ルートから第一クラック、古山・坂本パーティは地蔵ルートから第一クラック、そして天狗の踊り場へ3ピッチのクライミングを行なう。本図・高須パーティは、一番に登りきり、踊り場で“大根おろし”を登っていた。登攀が終了し、下山を始めたのは5時半過ぎであった。ガスった登山道をヘッデンを点けて下るのは、光がガスで散乱し見づらく、イヤラシイ。8時に登山道入口の車に着き、談合坂で夕飯を取り、つくばに着いたときは午前0時を過ぎていた。

### 10月2日 コースタイム

車(10:30) — 三段の滝下(11:39) — 稜線(13:42) — 三ツ峠山荘(14:02) —  
屏風岩でRCT — 三ツ峠山荘(17:40) — 車(19:44)

(古山正文 記)



三ツ峠・観音ルートを登る・本図

## 長谷川恒男CUP

1994. 10. 8~9

パーティ 高須章

東京都山岳連盟主催の第二回日本山岳耐久レース「長谷川恒男CUP」に出場した。

制限時間24時間。距離にして71, 5km。…というと簡単に思われそうだが、実際に走ってみると5kmの長さが、これでもかという位それぞれ長く『次のポイントでリタイヤしようかな』と何度も思わせる程、過酷なレースだった。

五日市の中学校のグラウンドをam10時スタート。参加者は1100名程いて、私は954番目だからかなり後ろの方だった。このレースは、山路が細くて進めなくなると言う話を聞いたことがあったので、始めはダッシュして前の方へ行く。しかし、登り坂になるとやはり走れない。今年になってからゲレンデや谷川岳に行っては雨で敗退ばかりだから、登る力は落ちている。でも今熊神社までの4.2kmは30分程で走れた。

ここからが山路だ。分岐点の三頭山頂上迄は、日のあるうちに着きたい。でも中々距離は進んでいない。全体に流される為、地図を見る余裕も無い。そうこうしながら走っていると、後ろから息の荒い女の子が追ってきた。

『まだ午前中なのにオーバーペースなのと違うんか？』と思っていたらどんどん先に行く。こいつをペースメーカーにさせてもらおうとピッタリと後ろを着いていく。あんまりひつこく追っていったら『人のお尻の穴ばっかり見やんとってよ』と怒られてしまった。僕は女の本能として、恋愛感情のある時は皆、無意識のうちに大阪弁をしゃべっていると思う。

ここでの登りは歩く。そして下り、平坦な道を走る。いいペースだ。ドンドン抜いていく。でも全く休まないで來ていたが、とうとう11時25分頃、3分間程休んでしまった。休憩後また走り出す。

12時過ぎに、彼女が休んで出登（出走）しかけたところに追いついたが、そこでまた休んでしまった。その後彼女に追いつく事は出来なかった。

これは休み時間を少なくしないと前の方の地位は難しいレースだ。

pm2:45…第一関門に着く。制限時間8時間の所だから大幅な預金だ。水がある500cc位しかない。2ℓの水では少なかったかな？あと2km先の水場まで節約しよう。

どうも苦しい。30分おき位に休んで水を飲んでしまう。そんなに喉は渴いていないのに無造作に飲んでいる感じだ。直ぐに日原峠の水場で500ccの補給をする。だいぶ増えた。でも節約して飲もう。よく考えるとこんな所まで、水を500kg分も担ぐんだから都岳連の人も大変だと思う。 $(500\text{cc} \times 1000\text{名} = 500,000\text{cc})$

ここからがダラダラと長く暗くなってきても、なかなか三頭山頂上には着かない。三頭山から直ぐに第二閥門がある。『ここでやめようかな』とチラッと頭を過る。でも第二閥門へ着くと、次の水場までは行こうという気持ちになる。

pm 6:20…三頭山頂上に着く。真っ暗で随分と寒い。テルモスが欲しい。水だとガブ飲みで必要以上に飲んでしまう様だ。15分位で第二閥門に着く。もう直ぐ水場だ。次は1,5ℓの水を補給できる。

pm 8:15…水場の月夜見山駐車場だ。ここは、トラックにドラム缶8本程の水が積んでいた。ここでは水は飲み放題だ。ガブガブ飲む。見るとここでリタイヤする人が、かなりいる様であった。道路を見た為に里心が出たようである。

岳連の係員が、近づいてきて『どこか悪いんですか』ときいてきたが、『俺はどこも悪い所なんか無いよ』と答えた。次の御前山に登ってしまえばやめようか……。たった4kmなのに係員は1、5時間位と言う。半信半疑で走り出すと案の定きつい登りやトラバース、道が崩れてたり、3級の岩場の登り降りがあって長い。流石に長谷川恒男CUPだけの事はある。

この頃になると勝負は度外視されて、他の登山者と仲間のような不思議な連帯感が生まれ始める。この頃トップランナーはすでにゴールしてシャワーも浴びている。

(彼はpm 6:30頃ゴール)

俺はpm 9:55…御前山頂上に到着。もう着順なんかどうでもいい。ゴールしよう。それが俺の実力だ。あとは大岳山で、また少しの登りがあるだけで下りばかりだ。でも疲れと眠気から足がガクガクして、歩いてても眠ってしまいそうだ。

am 0:45…大岳山頂上到着。遂に12時間を越えた。0時～1時にはゴールするつもりだったのに大幅に遅れている。でもここからは下り一方で、しめたものである。ドンドン下る。でも暗いのと疲れからか？走れない。『くそ！こんなレース2度と出るもんか！』と思ってしまうが、回りに文句を言う人は誰もいない。

am 2:15…御岳山の第三閥門。ここでもリタイヤがいる。もう絶対にゴールはしよう。am 10時が制限時間だから安心だ。でもアルカリ電池を3セットしか持っていないので最後までも持つか少し不安だ。ここで10分ぐらい眠ってしまった。眠っている間に、大分抜かれてしまったような気がする。

あとは10km程のダラダラといった下りと思っていたら、それが全く長くもうそろそろ終わりかなと思った頃に“あと5km”的表示。これには皆嘆いていた。

am5：15…夜がやっと明け始めてきた。…とやっと山路が舗装道路に変わる。非常に走りやすい。自分にこんな力が残っていたのかと不思議なくらい走れて、最後はダッシュして前方の走者を抜いてゴール。am5：45。

なんと所要時間19時間45分。

帰りにいなり寿司を食べていたら、喉にアゲが張り付いて食道を通過しなくて死ぬかと思ってしまった。飯が喉を通らないとはこういう事を言うんだろう。

(高須 記)

# 一の倉沢2ルンゼ～Bルンゼ

1994. 10. 9

パーティ L古山正文、坂本昭裕、中居康展

麻酔科にローテーションして2回目の休み、休日には絶対呼ばれないという素晴らしい環境下では山に行かない手はない。そこで古山さんに連絡しているうちに一の倉の何処か、もしくは幽の沢という話になり、坂本さんも来るということで手頃な所、しかも前から行きたかった2ルンゼ～Bルンゼに行こうということになった。ただ残念なのは10日に当直を頼まれた為、9日しか登攀出来ないということで、その点はあきらめた。（古山さん曰く、金に目がくらんだのだろう、との事）

坂本さんのレガシイで、  
一の倉に到着。すっかりテ  
ント村と化しているが、実  
際に岩に登る連中は半分も  
いまい。林道のずっと奥ま  
った所にテントを張り、早  
速ピールで乾杯。

翌日の晴天を祈ってシュラ  
フに潜り込んだ。

翌朝、まだ暗いうちから余  
り食欲の無い胃袋に食いも  
のを詰め込む。さすがに1  
0月に入ると朝6時前は暗  
い。沢の樹林体の中でだん  
だん夜が明けてきた。天気  
は一の倉らしく高曇り。雪  
渓は完全に消えて、例の5  
0メートル懸垂下降が必要  
だった。結構新しい残置ザ  
イルだったので8環をか  
けて沢身に下降、この時点



2ルンゼ取り付きにて…中居、坂本

でクレッターに履き替えて登る。坂本さんが一の倉デビューになるので余り無理はない。いつものことながら嫌らしい登り、中央稜の基部から何稜テラスを見ると順番待ちもいる盛況ぶりだが2ルンゼならば誰もいないだろうと本谷バンドのほうへトラバースする。意外な事に先行パーティがいて、我々は2番目の登攀となった。取り付きから見た2ルンゼは、傾斜も緩く技術的には易しそうだが、実際に登って見ると、濡れた岩と乏しい残置支点、岩の隙間を這いずるような圧迫感の強いルートで、技術的な事よりも体力（稜線まで抜ける為の）と経験を（最も大した経験ではないが）要求される。鳥帽子奥壁のルートのほうが解放感があり、快適な登攀が楽しめるといえばそうだが、このルートの特徴は何といっても稜線まで抜けるということであり、その点では充実感が違う。石門を抜けると滝沢の上部が一望でき、マッターホルン状岩壁に左右に食い込むA、Bルンゼが見える。2ルンゼそのものは石門で終了だが、ここから稜線までが長い。Bルンゼも下からではルートが判然とせず、嫌らしい草付を延々と登っていく。マッターホルン状岩壁を左手に見る頃からはっきりしたルンゼ状となり、半分沢登りのような感じで黙々と登る。ザイルがほしい所もあったが、結局稜線直下までのノーザイルですませた。（後で考えたがこんなルートでいちいちザイルを出していたらワンピバークだ）稜線直下でさすがに悪く感じるところがあり、ザイルを出した。ワンムーブで藪こぎとなり踏み跡を辿ると登山道に出た。



2ルンゼ終了点より鳥帽子奥壁を望む 中居&坂本

登山道は以外に人通りが多く、ザイルを引き摺っていると何となく奇異の目で見られてしまった。（写真まで取られてしまった）下のほうで何か言っているのだが良く聞こえないので大声で呼び返したりしていると、いきなり10メートルほど先を歩いていた登山者のおばさんが、良く聞こえないようすよと伝達し始めるではないか。どうやらそのおばさんの所からは下にいる2人が良く見えるらしく、少々間抜けな結末であったが稜線に無事全員到着し、完登の握手となった。最後は登山道を歩いて西黒尾根をひたすら下り、今回もなんとか無事に下界に帰り着いた。水上の駅まで送つてもらうつもりであったが道路は大渋滞だったので、明日も登攀の二人と分かれ電車と高速バスで真夜中の筑波に到着。もう一日登りたかったが内容的には十分満足できた秋の一日でした。

（中居 記）



稜線にて一服…古山、中居

# 谷川岳幽ノ沢V字状岩壁右ルート

1994. 10. 10

パーティ L古山正文、坂本昭裕

僕はその夜夢にうなされていたらしい。何故か重い荷物を背負わされている夢だった。とにかく背中と腰がきつい。休憩したいがリーダーにその様子はない。とにかくもう少しの辛抱だ、がんばらなければ。しかしこうして重いなあ…………。

ふっと我に返って目を覚ます。時計は2時を指している。何だまだ寝れるなあ。と思うと同時に背中の異常な重さに気つく。まさに夢の続きである。後ろを振り替えると古山さんが僕にピッタリとくつついていた。重いはずである。僕は少し古山さんの肩を上げると独りでにあっちの方へ転がっていった。

朝起きて食事にしようと思うが、昨日（一ノ倉沢2ルンゼ）の疲れと飲み過ぎのせいか少し食欲が無い。（でも今考えると、つるべで登攀するのは初めてということもあってか少々緊張していたのかも知れない）

ところで古山さんは昨晚のことは何も記憶が無いらしい。

6時過ぎにテントを出発して幽ノ沢へ向かった。歩き始めた頃は暗かったが、出合に着く頃は既に明るくなっていた。今日も晴れだ。

出合は思ったほど水量もなく、僕はクライミングシューズで歩いた。途中の大滝もザイルを出すことなく歩けたほど乾いていた。古山さんも前回との違いに驚かれていたようだった。『あっと、これは前回私が残したシュリングですね。』と言って誰もいない回りを伺いながら回収する余裕さえあった。

カールボーデンは、思いの外早く着いた。陰湿なイメージのある谷川岳にあってこの明るさはとても気持ちが良く、何故かしら登攀意欲も沸いてくる感じである。要に取り付いたのは8時30分過ぎで、ここからはぐんぐん高度をかせいだ。昨日も思ったのだが、何となく自分が尊くなる感じがした。我ながら幸せな奴だと思った。

5ピッチ目が前回時間切れとなつた場所だそうだ。なるほど草付きが嫌らしそうである。ルート図に書いてあるほど易しくはなさそうだ。15メートル程のスラブで、残置ハーケンも良く目を凝らさないと分かりにくい。古山さんが、心配して下さつて『ここは私が行きましょうか。』と言って下さつたが、自分のリードする順番である事と、ここが頑張りどころと判断してリードさせていただいた。古山さんから見ると少々不安が有ったと思いますが、その教育的な配慮と総合的な判断に感謝しています。

単に岩を登る知識や技術以外の大切さを古山さんから学んだ気がします。

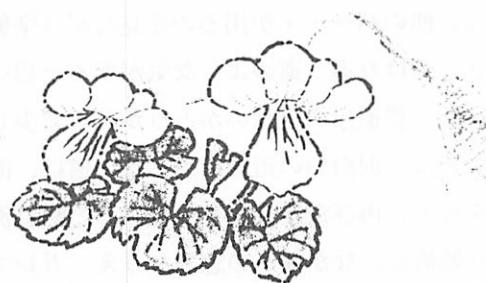
石楠花尾根から堅炭尾根に抜けるには以外に疲れた。特に問題箇所はなかったのだが、朝食を軽めにしたせいか少しバテ気味であった。その後軽く食事を済ませ下山した。帰りの中芝新道は時折雨に降られた以外は概ね快適であった。芝倉沢を通る風がバテた体には心地良く、足取りも軽やかであった。テントのある一ノ倉沢は観光客であふれていた。帰ってきた自分が多くの人に見られている気がした瞬間に尊く感じていた自分がいつもの自分に戻るのが分かった。まだまだ僕は修業が足りないと思った。

### コースタイム

一ノ倉沢出合(6:00) - 幽ノ沢出合(7:00) - カールボーデン・要(8:30) -

石楠花尾根(11:00) - 堅炭尾根(12:20) - 一ノ倉沢出合(15:30)

(坂本 記)



## 瑞牆山 十一面岩正面壁【春一番ルート】

1994. 10. 9~10

パーティ L本団一統、生井一男、佐藤文則

『おい、今度の連休な、ミズガキ山に決めたからな』と本団さんから連絡が入る。はて？ “ミズガキ山” っていうのは一体何処にあるのだろう。恐る恐る聞いてみると『知んねえのか！金峰山の側だよ』との事である。えれえこっちゃ、資料あるかいなと探し始める。

金峰山と言えば東京の近くだしと思い、登山体系の“東京近郊の山”を調べるが無い。金峰山すら乗ってないではないか、違ったか。無いかも知れないと思いつつ中央アルプス、北アルプス、明星・戸隠等を調べる。やはり無い。諦めて2、3日後もう一度見てみると“中央アルプス”の中に『瑞牆山』という見慣れ無い名前を発見する。やったこれだ。金峰山の近くで色々な岩峰がある。読んでみると随分色々な岩が有るようである。今回はその中の十一面岩（といちめんいわ、と読む）正面壁の“春一番ルート”に登ることにする。人工主体の330mと結構長いルートである。

下妻に集合し上信越道で佐久に出て、佐久から南下して中津川林道の方向に行く。途中で信州峠に道を取り黒森鉱泉に着く。更に林道を少し詰めると登山者の車らしいのが何台か止まっている。更に奥へと行ってみると直ぐに畠になり、道は無くなっていた。少しだけ広くなった所まで戻り、車を止め眠りに着く。

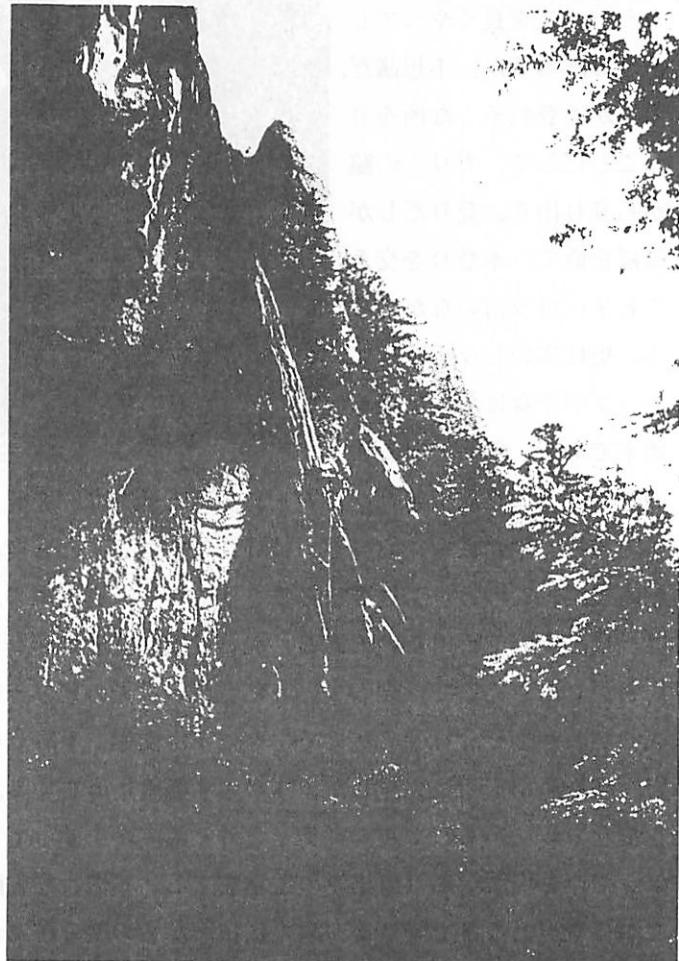
朝ゆっくりと起き出し、他のパーティが出るのを見ながら準備を始め出発する。昨夜車で登った道を歩くと、やはり違う道のような気がすると思いながら登っていくと、沢沿いに踏み跡が出たきた。農道用の道なのかどうか判らず少し他も探すがそれらしいのは見つからず、しかたなく沢沿いの道を行く。この道は、直ぐに沢からはずれ右岸に上がり又水平な道を行く、再び沢に合流し少し登ると涸れ沢が出てくる。これが取り付きへの沢かと登り始める。なかなかの急登なうえ、ガレっていてとても歩き難い。何とか基部に着くとそこは末端壁の基部で、少しトラバースした所から木の間をつたい降り再びガレ沢を詰める。ここから少しで、モアイフェースの下に出た。そして樹林帯を登ると正面壁の基部に着いた。燕返しの大洞穴を見たあと準備を始める。

生井さんがトップで登り始める。3級A0の記録を見て『アブミはいらねえ』等と言ひながら出るが少し登った所でアブミが必要になる。小さなハングが有るのだがフリーでは厳しい様である。更に上を伺うがルートが判りずらいらしく、先に本団さん

そして佐藤とそこまで上がるることにする。ピッチを切った地点から左へ行くとカンテ（小さな稜といった感じである）を回り込んだ様になり、そこにボルトが有るらしい。しかし、そのボルトの間隔が広すぎて届かず苦労しているとの事である。何度かトライしているとズルッと滑った。そこで更に大きく左にルートを取り、これもかなりボルトが離れていて苦労しながらも何とか上がる。ここまででとっくに昼を回り、本図さんにも少し焦りが見える。しかしその後はなかなか順調に登り、白熊の下のピッチでは凹角からフェースに出て、（ここは中々高度感が出るポイントである）途中、大きめなリスにアブミのプレートが突っ込んだやつにアブミを掛けたりして白熊のコルに出る。もうすっかりいい時間になっているので、今日はここまでとする。

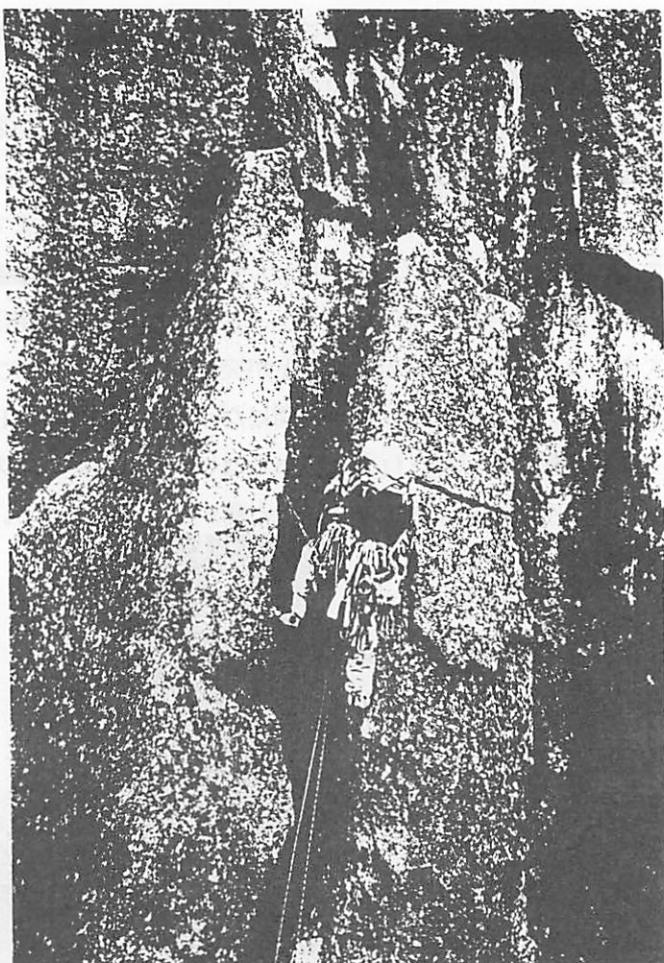
登攀は終了だがまだ行動は終わらない。茸取りがあるのだ！。このあたりは茸が沢山有り、本図さんの目はキラキラと輝いているのである。もう、誰にも止められない。行きしなに見つけた！ナラ茸の大株を見つけないと眠れない等と言いながら、来た道を必死で思い出しながら下る。樹林帯の中に何本も道があるのでとても判らないと思ったが、執念で見つけ出す。お陰でその晩は、たっぷりナラ茸の入った美味しい汁を頂くことが出来た。

さて2日目は昨日の様な失敗を繰り返さない様に早起きをして、早速登り始める。昨日通ったアプローチはしっかりと頭に有るので昨日より楽な気がする。今日は、白熊のコルより上部を登る予定なので白熊までは踏み跡を辿る。コルからは先ずは直上する。リッジ



十一面岩“春一番ルート”を登る

の様な小さなカンテをフリーで登り、カンテの上に立ったところから人工となる。小さなハングを越え、フェースを行くとT字リスの下に出る。ここで大きなミスをする。ルートは左に少しトラバースして上に行くのだが、大きく左に迂回してしまったのである。どうして佐藤が行くと、こうも大トラバースを良くやってしまうのだろうか、不思議だ。ともかく登れそうな所を登ることにして、ガリーの脇から登り出す。登りだしがほぼ垂直で、木登りを交えてヒィーコラ言いながら登る。更に次のピッチは遂にトップが空身になって登る始末である。覆っている岩



十一面岩・白熊上部に行く

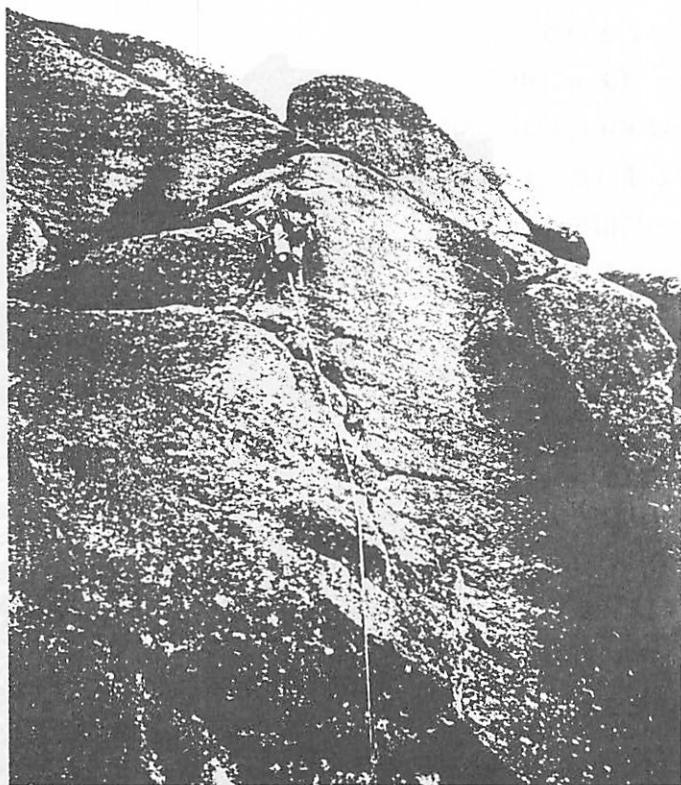
の一手を（大きなチョックストーンが有るチムニーを登る）強引にフリーで乗っ越すのである。生井さん、お見事。結局ここでは3人とも空身になった。ここを登って判つたのだが、このピッチは登る必要な無くルートを正規のルートの方に取っていたならば、殆ど歩いて行けたのである。流石は難関突破の迷クライマー生井さんである。ともかくにもここで正規のルートに合流し最後のピッチを登って終了。

天気がおかしくなり始めたので早々に下山開始。下降点を少し探したが、少し下って岩を回り込んだ所に発見した。すかさず懸垂下降をする。降りた所からは樹林帯の中を歩きコルに出る。コルでガチャを外し踏み跡を辿って下山。一方所だけロープが掛かっている場所があり肩絡みの懸垂をする。不慣れな佐藤はひっくり返りそうになりながらやっとこさで降りる。直ぐに白熊からの踏み跡に合流し、昨日より早く下山する。

コースタイム

10月9日 車(8:29) - 取り付き(10:09~1041) - 白熊のコル(16:03) - 車(17:31)  
10月10日 車(5:55) - 白熊のコル(7:39~8:32) - 終了(13:35) - 下降点(14:28) -  
車(16:31)

(佐藤 記)



十一面岩 “春一番ルート” を登る・生井

# 一の倉沢中央稜

1994. 10. 16

パーティ L古山正文、高須章、笹沢ひろみ

早朝の空気は、冬の景背が感じられるほどキンと冷たい。見上げる一の倉の岩壁は、首が痛くなるほど急だ。上部をガスで隠したこの景色は緊張感を増す。出合は、今シーズン最後といった感じで多くのクライマーで賑わい、紅葉の一の倉の絶景を写真に納めようとカメラマンの姿も多く活きていた。

私たちは早々に朝食を済ませ準備する。ここで大変なことに気づいた。ヘルメットが無い!!。全くこれでは先が思いやられる。リーダーの古山さんも困った様子であったが、『取り敢えず、取り付きまで行こう』ということで出発した。『ああ、中央稜を登るのは来年におあずけになってしまった。』目の前にあるのに指をくわえて見ているしかない。トホホのホ。情けない気持ちでトボトボと歩いていた。すると50メートル懸垂の所では、私はヘルメットをかぶっているではないか。そ～です。心優しい古山さんがヘルメットを貸してくれたのでした。当の古山さんはタオルで頭をぎゅっと縛っていました。

そして、いよいよ雪の消えた一の倉沢の深い谷に、懸垂しテールリッジへ、そして特に問題なく取り付き



中央稜の二人 笹沢&高須

点まで行く。いよいよここで待っているしかないんだ…と思っていたら『まあ、大丈夫だろう！』ということで登攀許可をもらう。気持ちは嬉しい様な？不安な様な？複雑な心境だった。私は心の中で、無事に帰ってこられますように…古山さんの頭に『らく』がきませんように。と祈り、後は神様におまかせして出発。スルスルとザイルが伸びていき『よし、いいよ～。』の合図に気持ちが引き締まる。1ピッチ目は緊張と恐怖心が強く動作がぎごちない。2ピッチ目の左への回り込みは、鳥帽子沢のスラブから出合までスッパッと切れおち高度感がある。3ピッチ目はいよいよ核心部。技術が追いつかず後続パーティに抜かれ戸惑った。



トップに行く高須

高須さんと古山さんは交代でトップを行く。2人は安定した登りで羨ましい。少し周囲を見る余裕が出てきた。木々が黄色やオレンジに色づいて秋の一の倉も、また素晴らしい。その後は、特に問題なくクリアして終了点に到着。帰りは北稜を下降。大嫌いな懸垂下降をする。途中、初体験の空中懸垂では体がぐるっとまわって大騒ぎで後は夢中で良く覚えていない。その後は、コップスラブから略奪点を通り衝立前沢を下り出合に無事到着。古山さんの頭も無事でなによりでした。

…今日も思い出に残る満足した山行となりました。

(笹沢 記)

## 尾瀬遭難者搜索

1994. 10. 19

パーティ L本団一統、鯉河仁志、菊地光夫、生井一男、高田暢年、佐藤文則、古山正文

17日夕、岳連の山崎氏から電話が入った。直感的に遭難だなと思った。だいたい、そんな時間の山崎氏からの電話は遭難なのである。聞くと岳連傘下の団体ではなく、水戸ハイキングクラブという労山加盟の団体であった。内容は4名で尾瀬燧ヶ岳の燧裏林道、天神田代から渋沢温泉小屋に向かう途中、2名が登山道にザックを置いてキノコ採りに樹林帯に入ったまま1名が行方不明というものであった。さらに行方不明になってからすでに4日も経つという。さて出動するとしても今晚ではあまりにも無理が多すぎる。私の仕事が急の休みは多くの人に迷惑をかけてしまう。少しでも影響が少なくて済むよう、明晚の出発ということで会員に連絡する。人間の心理として方向を失った場合、恐らく沢に降りているだろうと考え、沢登りの支度をしてくるよう指示する。有り難いことに私ほか鯉河、菊地、生井、高田、佐藤、古山の6名が休暇を取り、出てくれることになった。

18日夜、下館に集合し尾瀬に向かう。車の中では、無理に都合をつけ出動してくれた隊員にお礼を述べ、私が知っている状況を報告する。深夜、御池ロッジに着き、談話室で仮眠をとった。

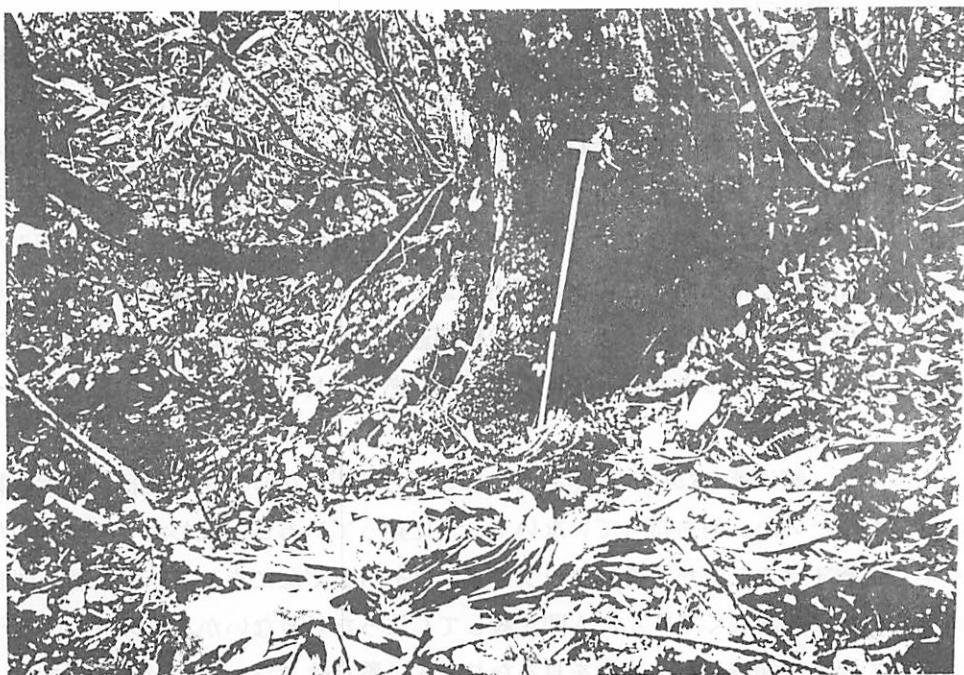
19日朝、岳連関係の救助隊は50名位であろうか。労山関係は指揮系統が別なのでわからなかった。やはり組織が違うと、こういう時は難しい。岳連の救助隊長より、昨日までの搜索経過報告があり、次のことがわかった。

- ①行方不明者は年配（男）で、この地区には何回か訪れたことがあり、地理に詳しいとのこと。
- ②前述した場所から東方向の樹林帯に入り、行方不明になったこと。
- ③ザックを登山道に置いて入ったため、衣類、食糧など何も持っていないこと。
- ④昨日までの搜索で、遭難者の物と思われるキノコの入った袋と、ビバークしたらしい場所を高石沢で発見したこと。

次いで班分けが行われ、我々は高石沢に入ることになった。我班にあと2人入り、9名になった。一人は昨日高石沢に入った者。もう一人は遭難者の御子息である。

我々9名は尾瀬口山荘まで車で行き、高石沢に入った。横一列に並び、遭難者を呼

びながらブッシュの中を進んで行く。やがてビバーク跡と思われる所を過ぎ、キノコ袋を発見した所に出た。沢はこの先、幅が狭まることは地図で見てわかっている。昨日この沢を下降した者がいるのだから、同じ所を行っても発見できる可能性は少ない。私は、なぜか高石沢の左岸の尾根が気になってしかたがなかった。この尾根はまだ搜索の空白部になっている。無線で本部にそこを探したい旨連絡すると、OKの返事が返ってきた。そこで昼食にしたが、不思議なことに誰かに急き立てられているようで、ゆっくり食事をする気分になれなかつたのである。我々は、ほどなくして腰を上げた。左岸尾根に取り付くため少し沢を降りることにした。私は取り付きやすい場所を選んだだけなのだが、そこは先程（登ってくるとき）から気になって、私が途中まで登った場所だったのである。そこから右斜上に50mも登ったろうか。トップの高田が声をあげた。そこには遭難者の杖がブナの大木に立て掛けた。そのうしろ5mの所に遭難者は遺体になっていた。私は、極めて冷静を装い、発見の報告を本部にする。



ステッキを発見！（笹の葉で作ったミノがあった）

もし最悪の状態で発見したときは、現場をそのままにしておくよう本部から指示をうけていたので、そのまま警官を待つことにする。現場は行方不明になった翌日雨がふつたそうな。よほど寒かったのだろう。シャツの一部を切り裂き、紐を作り、笹の葉を編んで蓑が作ってあった。そこには一生懸命生きようとした形跡があった。しかし、

寒さと空腹と真っ暗闇の孤独に耐えられなかつたのか、自殺を図つた跡があつた。さぞかし無念であつただろう。息子との対面はあまりにもむごいものであつた。息子が悲しさに耐えている様子がありありとわかつた。そんな息子を見ていると、なぜ自殺なんか、なぜもうちょっと頑張れなかつたのか、そんなことしなければ絶対助かつたのにと悔しさが込み上げ、涙が止どめなく流れた。遭難者の顔は、“俺は頑張れるだけ頑張ったんだ。そして力尽きたんだよ。なぜもっと早く来てくれなかつたんだよ”と訴えているように見えた。息子は自分のジャンパーを父の上に掛けやつた。しばらくの沈黙が続いた後、息子は私の所に近づき、握手を求めながらはっきりした口調でこう言つた。「本団さん的好判断で父を発見することができました。ありがとうございました」と。私は黙つて頭を下げた。いや、なにかを言おうとしたが言葉にならなかつた。その後、息子は隊員にお礼を述べたが誰も返す言葉はなかつた。警官、地元消防団、捜索隊が上がつてくるまで又沈黙が続いた。2時間位であったろうが、10時間位に感じられた。

なぜこの遭難者は沢に降りたのか。この辺の地理に詳しいのであれば、上に行けば必ず燧裏林道に出られるはずだということを知つたはずだ。実際はあまり詳しくはなかつたのだろう。さらに、それなりの装備を持たずに、未知の沢を降りてはいけないというは山の鉄則でもあるが、沢を降りたくなる心理は私にも理解できる。それならば沢を降りるなら降りるで自殺を図る前に、なぜ降りられる所まで降りてみなかつたのか。結果論になるが、この沢は登山道まで1時間、さらに民家まで20分、悪い所は一ヵ所もなかつたのだ。または山の鉄則通り、動かず体力の消耗を少なくしてゐたのなら、もうちょっと頑張つてほしかつた。あと2日、いや、あと1日でよかつたのに。

もう一つ、腑に落ちないことがある。なぜ行方不明になつてから何日も捜索依頼を出さなかつたのか。何も持つていない上、道に迷つてゐることはわかつてゐるのだから早く依頼すべきだった。所属クラブや家族はそれまでなにをしていたんだと聞きたいくらいだ。死ななくてすんだ人間を殺してしまつたじゃないか“このばかやろう”

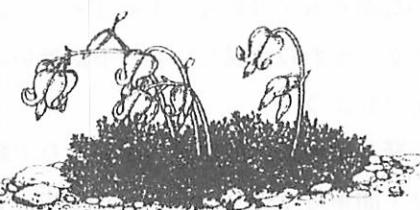
やがて警官が到着した。遺体を見るなり一人の警官はこうつぶやいた。「あれ、遭難じやなかつたの」。私はそれには何も答えなかつた。直ちに現場検証が行われ、第一発見者の高田は調書作りに協力した。ヘリによる搬出は無理と思われたが、ワイヤーを何本もつなぎヘリでピックアップされた。検死の結果、死因は衰弱死と診断された。自殺を図つたが死にきれず、結果衰弱を速めたのであろう。

御池ロッジで解散式が行われた。坂場岳連理事長の挨拶で、遭難者のポケットから

手帳が見つかり、“ここで救助隊を待つより自ら死を選ぶ”といった内容の手記と、家族宛の遺書が書いてあった旨の報告があった。さらに17日午後3時半と書いてあったそうな。

まことに残念な結果に終わったが、今現在でもあの遭難者の顔が頭から離れず困っている。発見できたのは、けして私の好判断ではなく、遭難者が息子を呼んでいたんだと思わざるをえない。だって私の指差した方向に数度の違いもなくドンピシャり居たということを偶然といえば偶然すぎるのだ。

(本図 記)



# 湯河原 幕岩⇒古賀志ゲレンデツアー

1994. 11. 5~6

パーティ L佐藤文則、高須 章

例年なら明星に行く季節だが、今年は3日が木曜日と休みが繋がらず無理となり、高須さんと二人フリークライミングのメッカ、湯河原幕岩に行く事にした。本来ならば、北岳へ正月合宿の下見を兼ねて行くはずだったが数日前の雪が残っているらしく、雪にそう慣れていない高須さんを連れて行くのをためらい、中止しての山行である。古山さんは北岳を中止した時点で不参加とのことなので二人となった。

北岳を中止したのが遅かったため当日の朝発とした。渋滞は覚悟の上である。しかし首都高は凄い。久しぶりに動かない渋滞にはまりゆっくりと首都高を抜ける。とてもゆっくりと。それでもなんとか2時過ぎに湯河原に着く。駅から先は分からぬので高須さんに道を聞くが、トンでもない所へ行かされてしまい閉口する。車一台やっと通れるような山道をしつかり山越えしてしまったのだ。運転しない人の道案内はとても恐ろしい。

そんなことをしていたので、結局着いたのが3時過ぎとなりとにかく岩場へ急ぐ。幸い駐車場から岩場までは近く5分ほどで岩場に着く。

先ずは、足慣らしといいながら5・8のルートにする。とは言え佐藤にとってはかなり高グレードである。しかしそれ以上易しいルートが無いのだからしょうがない。ああなんてレベルが高いんでしょう！

先ず高須さんがトップで登り始める。危なげの無い登りで終了。佐藤が行く。緊張しながら取り付く、アレッ？簡単だ！そう、そうなんです、5・8というのはとても簡単なんです、ここでは城ガ崎や古賀志の同グレードより数段易しい感じがする。そして難なく1ピッチ12m終了。1本登れて大分気が楽になり、次は佐藤がトップで行く事にする。

今度は少し難しく5・10位である。1本目、2本目のクリップをすると、垂直に近い斜面となり3本目のピンが凄く上に見える。小さいスタンスと掛けの悪いホールドを頼りに体をズリ上げ何とかクリップするが、その次が続かずフォール。細かいスタンスに足が掛からないうえ、ホールドも何とも力が入らないのだ。その後何度かフォールを繰り返し諦める事にする。選手交替で高須さんが行く。やはり3本目でフォールする。暫く繰り返しなんとか上まで登る。佐藤は今日はあきらめることにして、暗

くになりかけた道を大急ぎで下る。車に着くとそれでも真っ暗だった。やはり秋である。飯を食い直ぐに寝る。

翌朝、目が覚めると雨である。かなり激しく降っており、考えてしまう。本団さんや高田さんがゲレンデに行くとの事だったので、それに合流すべく古賀志に向かうこととする。

その前に小田原一夜城址の看板があるので行ってみることにする。雨の中二人で相合い傘で公園を歩いていくと天守閣の跡地に出た。ここは本当に小田原の眺めが良く、今度はきっと女の子と二人で来ようと思いながらドライブを始める。日曜日の早朝だから道は比較的空いており、昼頃には古賀志に着く。

しかし、ここもまた雨である。しかも本団さんの車もない。雨は小降りなので取り敢えず岩場と向かう。岩は思ったほど濡れていないのでやってみることにする。

粉屋の娘さんを高須さんが登るが、核心で滑って登れないようである。しょうが無いので佐藤が代わって行く。ここは、もう動きを覚えてしまっているので何とか上まで抜ける。しかし、その後トップロープにするも高須さんは靴が悪いとのたまいで登れずにいるので適当なところで切り上げた。

とにかく、登るよりドライブがやけに長く、金の掛かったゲレンデ巡りでした。

#### 【登ったルート】

幕岩………蟻さんルート (5. 8)

マゾ桶さ (5. 10 a)

古賀志………粉屋の娘 (v +)

(佐藤 記)

## 関西の名物ゲレンデ

1994. 11. 12~13

パーティ L 高須 章

大阪の本ちゃんルートというと御在所岳位なもので、関東の谷川岳や八ヶ岳の様な手軽さはないが、ゲレンデというとJRの三四駅の手前の道場駅で下車して右に裏六甲・烏帽子岩、駒形岩、左に六甲・不動岩を目指すことができる。

JR大阪駅から1時間弱、駅員さんが居ないので大阪から最初の料金で往復してしまうような人もいたりします。

道場駅を出て直ぐ右に、“ドン”とかいうジュースとかを売っている酒屋さんが有ります。こここの若夫婦がクライマーに理解がある人で、『さっき南さんが不動に行きはったでー』とか、『今日は朝から織田チャレと小山さんが入ってるわ』とか気軽に教えてくれて助かることが良く有ります。そのお陰か土曜の夜などは、この酒屋の前でクライマー達の宴会が当たり前の様に行なわれています。

11月11日（金）不動岩…一人

11月12日（土）烏帽子岩…南さんと

11月11日は一人で、ソロエイドでリードの練習をしようと思った。

ソロエイドは上に登ろうとするとき、次ぎのボルトまでのピッチ分3~5mは前のたぐっておいてから登らないといけない。だからもし墜ちたら通常の4倍は墜ちると考えて良く、墜ちる長さを想像すると目眩苦茶恐くてとても『墜ちても平気』とは考えられない。むしろ、他人にはなんと言われようとも『絶対に落ちんとこ』と思ってしまうこの日もソロエイドで不動MCフェースのルンルンサーティ5. 10bを登ろうとしたが先にロープをフィックスしようと5. 9をリードしたら余りの恐さにA0を使いまくって必死になってしまった。

もういいかと諦めて人のソロクライムミングを見ていたら、上からロープをフィックスしてユマールをつけ、ロープの下にザックをぶら下げて重りにしている人がいた。

ソロエイドでもこの方法を使うといいと思う。

11月12日は、大阪勝山山岳会の南さんと烏帽子岩に行った。

## 西上州、焼岩・大山

1994. 11. 27

パーティ L本団一統、古山正文

また西上州の時期がやってきた。ここは11月3日に生井、佐藤、鈴木、今井の4名と共に行ったが雨で登れなかった。こんな山をなにで見つけたかというと、打田鉄一氏編のハイグレード・ハイキングという本からである。打田氏とは面識はないが知り合いである。ちょっとしたきっかけで文書による交流が続いているのだが、お互い顔を知らないので、もしかするとどこかの山で会っているかも知れない。齢も私と同じで、同時期を登山で過ごしてきた。しかし、登山といつても私とはジャンルが違い、彼はヤブ山を好み、数多くの道なき山を踏破し、紹介してきた。私の最近の西上州における山行計画は、彼の紹介記事を参考にしていることが多い。私個人の感想だが、西上州は岩山ではなくヤブ山であろう。たしかに岩が露出している部分もあるが、登つてみるとヤブが多く、岩登りの対象になるものは少ない。しかし、以前登った碧岩西北壁や叶山のように垂直の（あるいはそれ以上の）大岩壁もいくつか認められる。でも、岩は脆く大変困難というより危険を伴うのが常である。今後もフリークライミン



西上州大山・焼岩…岩稜を行く古山

グの対象にはなりにくいと思う。であるから、今度行くところはもしかして素晴らしい岩登りが味わえるんじゃないかと期待しつつ出かけるのだが、たいがいは裏切られる。裏切られても裏切られても、この山塊が好きなのだから、なぜあんな所がいいのと聞かれても説明のしようがない。西上州はこんなもの、と知っているつもりだが期待してしまう。所詮、北アルプスの様な岩稜を期待するのが酷というものである。今回も期待してはいけないと思いつつ期待しながらでかけたのである。

それでは山行報告をしよう。27日、天丸橋に車を止め歩き始める。昨夜降った雪が道を白くしている。太尾トンネルを過ぎた所から取り付く。焼岩を過ぎ、懸垂を一回した他はとりたて書く所もなく、県境稜線にてた。ちょっとした西上州らしい岩稜がでてきたがすぐに終り、次にでてくる岩場はどんな所と期待するも間もなく大山頂上に着いてしまった。それでは下降はどんな岩場を下るのかと思いはじめたら天丸橋に着いてしまった。以上で山行報告は終りである。

今回もハーケン、ハンマーはただの鉄屑にすぎなかった。快適な岩稜、岩壁に出会えることを夢見て、いつも持参しているのだ。ちょうど宝探しの気分かな。帰りの車の中では“次の西上州はどこにしようかな”などと考えているバカな私であった。



大山頂上にて・古山・本図

コースタイム  
車(8:25) - 取り付き(9:00) - 燐岩(9:53~10:01) - 稜線(10:44) - 分岐点(11:15)  
- 大山(11:37~11:55) - 車(12:57)

(本図 記)

這裏除了「水」之外，還有許多我們所未嘗見聞的東西。在那裏，我第一次見到山比當的黑鷹飛過來，一時還以為是老鷹，那樣的鳥在中國是沒有見過的。我還第一次見到在那裏的森林中，這種色彩鮮豔、形狀像蝴蝶一樣的蝶兒，我還第一次見到在那裏的森林中，這種色彩鮮豔、形狀像蝴蝶一樣的蝶兒。



# 富士山登頂〈一日で標高差2900mを登る〉

1994. 12. 2~4

パーティ L村上茂樹、高須 章

冬山に向けて足慣らしにこの時期の富士山へ何度も行ったことがある。しかし、今回は日々気合いの入った体力トレーニングに励んでいる高須さんと一緒に、ちょっと趣が違う。最初はスバルラインから五合目経由で行こうと考えたが、スバルラインは雪の為昼頃まで通行止めのことも多い。それなら思い切って富士吉田から歩こうと言うことになった。

12月2日、土浦17:55の常磐線に乗る。高須さん曰く、この列車は土浦で何両か連結されるので、後ろの車両に行けば必ず座れる。東京駅で弁当を買い、中央線に乗るが、ここでも乗つてしまふと座ることが出来た。22:50に富士吉田駅に着く。帰りは五合目からバスに乗れないかと駅員に聞いたが、11月末でバスは運休との事。ビールを買い浅間神社の近くでツエルトを張つて泊まる。

12月3日、朝外に出ると富士山が黒っぽい。この時期、こんなに黒い富士山を見るのは初めてだ。6時に出発し、中の茶屋への真っ直ぐな車道を歩く。中の茶屋は建て替えられて新しいが、こんな所で商売が成り立つんだろうか。ここには2、3台車が止めてあり、テントを張っているパーティもあった。

以前来たときは、道が荒れていて中の茶屋まで來るのも大変だったが、今はその先の馬返しまで整備されていて、馬返しにも2台車があった。馬返しからは途中2回の休憩で佐藤小屋に着く。この週末は都岳連の救助隊がパトロールをしているそうで、佐藤小屋にも都岳連の人が詰めていた。ここでコーヒーを飲んで頂上を目指す。

7合目は風が強く、時々耐風姿勢を取つたりして、時間が掛かる。これでは先が思いやられると感じたが、次第に風は弱まる。八合目から上はいつもと違つてとても苦しく4~5歩動いては立ち止まり、なかなか進めない。暗くなるまでには頂上に着きたいと思っていたが上に行くほどペースが落ち、ヘッドランプこそ出さなかつたが、頂上に着いたときには暗くなっていた。小屋の陰にツエルトを張つた。

次の日は寝坊して6時に起きる。雪訓に来ているはずの本団さん達と交信を試みるが、連絡が取れない。天気が良く、最高地点の剣ヶ峰までを往復する。途中、10人位のパーティに出会う。その中に高須さんの知り合いがいて、山学同志会であることが分かる。

下山を始めると吉田大沢で沢山の人が雪訓しているのが見える。高須さんが何度か無線機を取り出しが、やはり交信できない。高須さんは『モートーズさ~ん』と何度か大声を出しが、返事が無い。僕はもう諦めましょうと言うのだが高須さんは諦めず本図さんを見つけようと声を出す。遂に諦めて6合目まで来ると、都岳連の人達が沢山いて登山道は土ぼこりが舞っていた。

佐藤小屋に着いて、駅まで約4時間歩くのを覚悟ていた。しかし、高須さんが本図さんのネームヴァリューを使ってヒッチハイクに成功した。都岳連の人達が富士吉田駅まで乗せてくれることになった。駅前の「熱海屋」という飯屋で食事をして帰途に着いた。

#### コースタイム

12/3 浅間神社(6:00)ー中の茶屋(7:00~7:15)ー佐藤小屋(10:30~11:00)ー  
頂上(17:15)

12/4 頂上出発(8:20)ー剣ヶ峰(9:00)ー帰着(10:00)ー佐藤小屋(13:00)

(村上 記)



(参考)

# 富士山に想う

1994. 12. 4

パーティ L本図一統、佐藤文則、坂本昭裕、馬渕勝則、中居康展、告広道

まだ小学生だった頃、通学路の途中から富士山を眺めることが出来ました。もちろん、その時に登ってやろうなどとは思わず、唯日本一の山ぐらいにしか想っていませんでした。

今回富士山の途中で、雪上訓練…雪上歩行の仕方、ザイルワーク、ビレイの方法等を訓練するパーティと頂上を目指すパーティの二つに分かれてしまいました。山をなめている私はその時チーフリーダーの高田氏に『僕も頂上に連れて行ってください』と頼みました。するとリーダーは『行くって言ってくれるのは嬉しいけどおまえは無理だ！』とあっさり断られました。内心そんなに警戒することないのにと腹を立てていました。しかし実際に富士山に行き、自分の身の程知らずを思い知らされました。

前日、中の茶屋で一泊し5合目まで車で行き、そこから登り始めました。風が結構強く寒かったのですが天気は良好だし、快調に飛ばしていくぞと意気込んでいたのですが、6合目を過ぎたあたりから頭痛がひどくなり途中で歩けなくなりました。

『ひょっとして高山病かな』等と考えながら、風が来ない暖かいところでサボッて煙草を吸っていると、頭の痛みが消えていきました。どうやら、頭が冷え過ぎで痛んだようですが、こんなになる事も分からなかった私が頂上パーティに加わっていたなら、多分ヘロヘロになって足を引っ張っていたでしょう。

まだ、今年の富士山は雪が少ないようで、雪訓予定地まで来るといくつものパーティが所々にある小さな雪の斜面で、各々に訓練に励んでいました。

古山氏と本図氏が何とか訓練できる場所を見つけてくれました。本図氏の分かりやすい説明での訓練は大変為になり今回参加できて本当に良かったと思います。

唯、初めて富士山に行ったのですが、山登りで考えると、ダラダラと同じような風景の続く、面白味の無い山でした。そう、人間でたとえるなら、がたいの大きい遠くから見ると美男子だけど、近くで見ると大したことの無い男と言うところでしょうか。

(告記)

# 《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

## ありがとうございました

### 月報

- ◎Rohman NO. 114 1994. 10 B5 24P 浦和浪漫山岳会  
苗場山・釜川千倉沢横沢右俣、谷川岳一の倉沢2ルンゼ～Bルンゼ、信越・三かべ山～魚野川本流～赤石山～熊の湯、越後・北ノ又川大ビラヤス沢、山書彷徨、雪崩救出訓練参加報告ほか
- ◎Rohman NO. 115. 1994. 11 B5 32P 浦和浪漫山岳会  
秋の集中・下津川山特集 下津川本谷、銅倉沢本谷、小穂口沢北沢、小穂口沢南沢ほか
- ◎Rohman NO. 116. 1994. 12 B5 P 浦和浪漫山岳会  
皆瀬川虎毛沢支流赤湯又沢ピストン、奥利根・柄沢～上ゴトウジ沢～米子頭山西尾根、上越・ヤスケ尾根～大源太山、富士雪上訓練、下田大川支流鷲ヶ沢、1995年年間計画表、1994年度山行一覧ほか
- ◎月報・Z A C NO. 157 1994. 9 B5 10P グループ・ゼフィルス  
杉田川、小室川谷、山形・摩耶山、湯ノ沢岳、妙義・仲木沢鳥帽子沢、甲子山阿武隈川大白森沢、会津・檜枝岐川下ノ沢、奥只見・銀山平～荒沢岳ほか
- ◎月報・Z A C NO. 158 1994. 10 B5 12P グループ・ゼフィルス  
南八幡平葛根田川・滝の上温泉～北の又沢左俣～八瀬森山荘～松川温泉、奥只見・袖沢乗越～丸山岳～朝日岳、上武国境・中津川神流川河沢左俣ほか
- ◎わらじ NO. 463 1994. 10 B5 12P わらじの仲間  
谷川・荒沢本谷、黒部・赤木沢～裏銀座縦走、関西便りほか
- ◎わらじ NO. 464 1994. 11 B5 20P わらじの仲間  
秋の集中 越後・大源太山、大源太川・北沢本谷、大畑ノ沢4ルンゼほか
- ◎わらじ NO. 465 1994. 12 B5 16P わらじの仲間  
冬の剣岳を目指して、総会を考えるほか
- ◎逍遙 NO. 41 1994. 10 B5 8P 逍遙溪稜会  
朝日・見附川見附荒沢～出合川岩屋沢、谷川・大源太川北沢、奥秩父・丹波川小常木谷、谷川・湯桧曽川白樺沢、湯桧曽川本谷、白山・犀川倉谷川ほか
- ◎逍遙 NO. 42 1994. 11 B5 12P 逍遙溪稜会  
巻機・登川神宇川金山沢、白根・長篠川元山川南ゼン沢、谷川・平標沢、仙ノ倉谷東ゼン、檜又谷ススケ沢、奥多摩・峰谷川坊主谷ほか
- ◎逍遙 NO. 43 1994. 12 B5 10P 逍遙溪稜会  
南会津・実川硫黄沢～尾瀬きのこ採り山行、身延山地・戸栗川温井沢、丹沢・水無川本谷、玄倉川ザンザ洞ほか
- ◎山紫水明 NO. 6 1994. 10 B5 8P 山旅の会  
拘りの山旅、早出川中流、ほか

- ◎山紫水明 NO. 7 1994. 11 B5 8P 山旅の会  
旅の果て、白子森、奥多摩樺葉窪ほか
- ◎山紫水明 NO. 8 1994. 12 B5 12P 山旅の会  
葛根田川、生保内川~朝日岳ほか
- ◎峻嶺 NO. 7 1994. 11 B5 18P 邑行クラブ神奈川  
上信越・エビリュウ沢、下田・笠掘川砥沢川、会越・叶津川、越後・北ノ又川岩魚沢  
白沢、奥多摩・小川谷滝上谷、南ア・大井川信濃俣河内ほか
- 
- 会報、その他
- ◎むげん NO. 7 1994 B5 273P 山岳溪流つり集団むげん  
移植放流について、魚とのつき合う方法、広沢寺岩トレ、つづら岩岩トレ、大井川  
寸又川、太刀岡山岩トレ、タイムスリップの旅(黒又川出合沢)、会津叶津川、花金  
岩魚釣り(熊野川)、水の壁(丹沢小川谷)、朝日見附川、南会津檜枝岐川硫黄沢、奥  
多摩逆川、丹波川、奥秩父笛吹川東沢釜の沢、湯河原幕岩岩トレ、新人紹介ほか
- ◎年報-17 溪 1992山行報告集 特集下田・川内 B5 140P 浦和浪漫山岳会  
下田川内・ぶな沢、鎌倉沢、室谷川本流右俣、杉川、金ヶ谷、丸山沢、ドウガン沢、中  
杉川ホリンド沢、ゼンマイ沢大俣、ゼンマイ沢小俣、ボブ沢右俣、春の集中巻機  
山・五十沢中ノ滝沢、下ノ滝沢、登川柄沢、登川米子沢、秋の集中万太郎山・万太郎  
本谷、谷川本谷、マチホド沢本谷、赤谷川本谷、冬合宿奥利根、春合宿丹後山集中、  
その他上越・越後・会越・東北の山など記録多数
- ◎年報17 わらじ 1993年度記録 B5 259P わらじの仲間  
夏合宿飯豊連峰・北股川財布沢、実川本流、北股川鮎倉沢、飯豊川赤津沢、冬合宿  
越後三山・荒沢岳~中ノ岳~八海山、郡界尾根~駒ヶ岳~中ノ岳~日向尾根、春の集中  
丹沢、秋の集中谷川連峰、サブ合宿八ヶ岳東面、沢登りは北海道から白山まで40  
本、雪稜雪壁は上越国境から北アルプスまで18本、岩登りは11本、山スキーは6本、  
積雪期縦走は3本、無雪期縦走は12本、プロードピークなど記録多数

以上閲覧したい方は本図まで

## 《編集後記》

最近、日本よりも海外に興味が出てきたみたいで、写真集とか、本を見ていると、心が落ち着く様な楽しいような感じがしますね。

んん…写真集と言っても、某〇氏等の見る〇〇〇ヌード写真集じゃないよ。写真集では、白川義員氏の『ヒマラヤ写真集』、岩合光昭の『アフリカの写真集・ヌーの川渡り』とか、書物では、岩合日出子の『アフリカボレボレ』、恵谷治の『ギアナ高地を行く』、岳真也の『タクラマカン砂漠漂流記』という物を見たり読んだりしてると、そんな体験が出来たらなあと思ってしまいます。ヒマラヤとか、ヨーロッパアルプスとか、ロッキー山脈、ギアナ高地、タ克拉マカン砂漠、インカ帝国、セレンゲティ国立公園、キリマンジャロと写真を見ていると…ああ～行きたいよう。行きたいよお～うちの会じや、しばらく海外には行かないだろうからなあ…それにサラリーマンじゃそんな我まま出来ないしなあ～ああ～宝くじでも当たらないかなあ。そうしたら半年位あっちこっちに旅するんだけどなあ…と夢多き編集長の独言でした。

(生井一男)



---

季報[R&V] 第15号 発行1994年 秋号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-006 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男

編集者：生井一男

印刷所：やまと印刷所

---

